

# 幼児と音感

財団法人幼児研究所

井上 範子  
佃 範夫

適期教育としての音感教育については、昨年の保育学会において発表したが、今年も音感教育の適期についてはそれとほぼ同じような結果を得た。すなわち和音・単音の聴音判別力は、いずれの場合においても年長より年少の方がよいということである。しかしながら、全体的には年長児より年少児の方が音感はよくつくといわれながら、各個人について調べてみると、家庭に楽器がなく、特別指導もしていないのに音感がよくつく子どもと、楽器があり、家庭で個人指導をしているのにつかない子どもがいるということである。そこで今回はどんな子どもにも音感がよくつき、どんな子どもにつきにくいかという問題を取りあげてみた。その結果一般的にいえることは、

- 一、音感のよくついている子ども
  - 1、注意力がありおちついてよくきく子ども
  - 2、音楽が好きで家庭にピアノ・オルガンがあり、それらによくふれている子ども
  - 3、家庭で個人指導をうけている子ども
  - 4、知能のすぐれている子ども
- 二、音感のつきにくい子ども

1、注意力散漫でおちつきのない子ども

2、音楽があまり好きでない子ども

3、知能の低い子ども などがあげられる、しかしこれはあくまでも一般的であって、音感のついている子どものもつ条件をすべて備えているにもかかわらず、音感のつかない子どもが、一年保育6%、二年保育5%となっている。したがって知能のよしあしが音感のつく決定的要因とは思われない。むしろ静かによくきくという態度の方が大切なようである。とすると、私たちは集団指導を中心としているので、常にその環境構成に注意を払う必要がある。最近リズム感というものも少し関係するのではないかと思っている。

今後こうした音感のつきにくい子どもを要因をより一層追求し、いかに指導していけばよいか研究していこうと思っている。

## 遊具の所有化される過程

(第二報告)

お茶の水女子大学

桑田 明子

本研究は前回発表の研究「遊具の所有化される過程」にひき続きおこなったものである。前回は東京の新宿にある伊勢丹デパートの玩具売場で観察をおこなったが、その対象は主として山の手階層の子どもとその親であった。今回の研究の目的は玩具の所有化の過程

が地域によってどのように相違するかみようとするもので場所は工場街を背景にしている川崎の「さいかや」デパートを選んだ。観察の対象となったケースは六〇ケースその内訳は幼稚園以下と思われるもの一八幼稚園々児と思われるもの三六、小学校児童と思われるもの六でいずれも母親または父親または家人が同伴している。結果の整理は次の点に關しておこなった。第一は所有化の型、第二は親子関係と禁止の数、第三は禁止の理由、第四は親子関係と玩具要求数、第五は年令との関係、第六は同伴者との関係、第七は満足状態についてである。これは前回と全く同じ方法である。結果について前回研究のものと比較考察すると、第一の所有化の型では工場街の方が山の手より親中心に傾くといえる。次に親子関係と禁止の数であるが子ども中心の場合は両地域とも禁止のあるものないものほぼ同数であるが親中心の場合において工場街では禁止のあるものがずっと多くなっている。次に禁止の理由については山の手と同じように内的理由が多くみられる。次に親子関係と玩具要求数については玩具要求数が山の手では子ども中心の方が親中心よりも多くなっていたが、工場街ではほとんど差がみられない。次は年令との関係についてみると小学校では両地域とも子ども中心が多く、幼稚園以下では親中心になっている。しかし幼稚園の場合は工場街ではかなり親中心に傾いている。次の同伴者との関係では父親同伴の場合に山の手と同じく子ども中心が多くみられるが山の手に比べてやや親中心の傾向がみられる。父母同伴の場合には工場街で子ども中心は一名もみられなかった。次の満足状態については工場街の方が山の手に比べて子どもが玩具を手にした時の子どもの表現からそれを捉えにくいということが言えるように思われる。

## 日本昔話を通じてみた

### 幼少年期の道德観

——第一報 報復についての考察——

呉・銀の鈴保育園 畑 都代子

同 右 坂田美美子

呉・大洋幼稚園 大野 煦

広島女子短期大学 山内美子

研究目的 戦前の因果応報性のある日本昔話から、戦後の同情性を含んだ昔話に改訂されているが、外来の昔話は戦後もほとんど改訂されていない。精神衛生上よりみた童話の在り方はいかなるタイプのものを与えたらよいか。一報では報復について検討したい。

研究対象 島嶼部、農家の比較的多い広島市内の小学校二校。呉市内の東西南北、中央の五保育所を選んだ。年令は五〜八才である。

研究方法 舌切り雀、かちかち山の戦前、戦後の話をして聞かせ、学童は調査カードへ〇印をつけさせ、幼児は別室で個人面接した。研究成績並に考察 年令別にみると舌切り雀の婆、かちかち山の狸は「殺されてもよい」という肯定型は幼児(学童)である。性別にみると幼児間は男へ女と有意の差が認められる。この応答者は男女を